

中国空軍の大規模対抗演習

漢和防務評論 20151002 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国空軍は、第3世代戦闘機数の増加、早期警戒機の運用が軌道に乗る等により、空中対抗演習の規模が次第に拡大しているようです。
今日の紹介記事は、主として中国国内で情報収集に当たる西側情報筋から KDR が得た情報ですが、KDR が得た独自情報もあります。
おどろくべきことは、早期警戒機から戦闘機に対する指示が音声によっていることです。台湾軍も台湾海峡で中国戦闘機の交信をモニターできているとのこと。真偽を疑う話ではありません。

KDR JOHN CHANG 北京特集記事（編集部再編集）：

北京駐在の西側情報筋は、最近行われた中国空軍の大規模演習に就いて、KDR に対しその特徴を述べた。2014 年及び 2015 年の空軍対抗演習は、相当多くの戦闘機が参加して行われ、重点演習項目は、協同・一体化・情報化作戦能力の強化にあった。しかしこの演習も NATO 水準から見ると依然として劣り、具体的には、空中指揮に問題があった。消息筋はこのように述べた。

上述の情報筋によると、いくつかの演習では、KJ-2000 型早期警戒機を含む 2 機以上の早期警戒機を出動させた。演習方式自体は、早期警戒機からの空中指揮を主とする方式に移行しつつある。第一に、協同作戦の規模が大幅に拡大している。1 回の対抗演習で赤軍側が 12 機以上の J-11 を出動させ、青軍側の 4 機及び 8 機の J-10 に対抗させた。この情報は、中国軍の刊行物にも公表されており、J-10 側が常に勝利したと記述している。

”ある演習では、1 回に出動させた作戦機が、早期警戒機が 2 機、J-10 が 4 機、SU-30MKK が 3 機、J-11/SU-27UBK が 8 乃至 12 機であった。対地攻撃演習は、通常 3 機で行われ、ある演習では H-6H が 3 機、或いは SU-30MKK2 が 3 機、或いは JH-7A が 5 乃至 7 機で行った”。情報筋はこのように述べた。

西側情報筋による中国空軍の演習の規模、演習の特徴に対する評価は詳細である。旧世代の J-7 及び J-8II 戦闘機も演習に参加している。通常、6 乃至 7 機の J-7 或いは J-8 が赤軍に扮し、第3世代戦闘機と対抗する。この対抗の目的は、劣勢戦闘機が F-16 や F-15 に勝利する戦法を研究するためである。消息筋は：中国空軍は、空軍内部で「インド空軍作戦の特徴」、「台湾空軍作戦の特徴」、「米国空軍作戦の特徴」、「日本航空自衛隊作戦の特徴」等のシリーズ著作物を発行し、米、日、台、インド空軍の訓練、装備、戦闘機紹介、基地分布、作戦理論等の情報を重点研究させている、と述べた。この動向から、中国空軍の仮想敵の順番が分かる。”一部の対

抗演習では、J-10 がインド空軍の SU-30MKI に対抗する戦法を演練している。後者に扮するのは大部分が SU-30MKK 及び J-11 シリーズである”。しかし KDR は、これらの対抗機種ではインド空軍 SU-30MKI を現示することは不可能であると認識する。なぜならインド空軍 SU-30MKI は、レーダー及びエンジンが中国の J-10、SU-30MKK、J-11 に比べ半世代以上、性能が優れているからである。

J-10 をもってインド空軍 SU-30MKI に対抗する情報は、衛星写真から獲得したものである。2014 年以降、ゴンカル飛行場（チベット自治区）には多くの J-10 が進駐している。その理由は、インド空軍が J-10 の性能を把握していないからである。SU-30MKK 及び SU-27SK の性能については、インド空軍は、ベトナム或いはロシアから直接得ることが可能である。

空中戦の演練においては、多くの場合、J-11 が F-15 を模擬する。J-10 は台湾軍及び米軍の F-16 の戦法を模擬する。近年来、中国空軍は、恒常的にパキスタン及びトルコを通じて F-16 の性能特性を入手しようとしている。

多くの対抗演習では、軍区を跨いだ訓練が行われる。例えば、5 機の SU-30MKK が 8 機の J-11 と対抗する等である。西側情報筋は：今のところ、団対団レベル（24 機対 24 機）の対抗演習はあまり見られない、と述べている。通常、第 3 世代戦闘機を装備する戦闘機団は、24 乃至 26 機の J-11 及び 28 機の J-10 で構成される。このように見ると、中国空軍の空中対抗演習は、最大規模でも大隊規模に留まるようだ。このレベルは、当然 NATO の対抗演習に比べれば規模的に小さい。これは、西側情報筋が”中国空軍の一体化作戦能力は、NATO に比べれば依然として劣っている”と判断する根拠になっている。

また西側情報筋は”奇妙なことに、彼ら（中国空軍）の第 3 世代戦闘機の大多数が、すでにデータリンクを搭載しているにもかかわらず、空中指揮が依然として音声で行われている。しかも秘匿装置がない。したがって容易にモニターできる”と述べた。この話は、台湾空軍の消息筋が以前 KDR に披露した内容を裏付けた。台湾海峡に出現する中国戦闘機に対する空中指揮は、音声で行っている。中国空軍のパイロットはデータリンク方式の指揮に慣れていないようだ。

八一飛行表演隊（注：中国空軍のアクロバットチーム）の LIMA（マレーシア、ランカウェイ海上・航空宇宙展 2015）における空中演技を見た第一印象は：指揮の点からも、パイロットの対応、飛行中の連繋演技の点からも、NATO 或いは老練な NATO 国家の空軍に比べれば、相当遅れている。

「西側情報筋の：今のところ、団対団レベル（24 機対 24 機）の対抗演習はあまり見られない」との情報に就いて、KDR はある演習で、赤軍及び青軍双方から J-11 シリーズ戦闘機が同時に 24 機出動したのを発見した。このことは、中国空軍の第 3 世代戦闘機部隊は 1 回に 1 個団規模を出撃させ、空戦させることが出来ることを示している。しかもその他の国家の情報によると、すでにその形跡があるという。過去 3 年来、1 回の空中対抗演習で赤軍、青軍双方が 34 機に及ぶ J-11B/J-11A/SU-27SK を出動させ、対抗演習を行った演習例がある。その中の一

方は、団としての建制を維持しつつ戦闘を行ったのであろうか？この種の演習では、従来の機体 SU-27SK/J-11A に新型の J-11B を対抗させるテストを行った可能性がある。航空兵第 1 師団は、1 回に 10 機の J-10B を発進させた。

また各種情報筋から入手した情報によると、大規模協同対抗演習において、J-7 及び J-8 の出動回数が減少しつつあり、参加規模がますます縮小しているようだ。このことは、中国空軍の主要戦力がすでに第 3 世代機に移行し、J-7 及び J-8 は訓練用に比重が移りつつあることを意味する。ただし J-8F だけはまだ使えるかもしれない。

また奇妙なことに、聯合作戦演習において、SU-30MKK、J-11、SU-27SK が一回に出撃する機数は、一般的に J-10 に比べて多い。J-10 は中国が自力開発した機体であるのに。しかし KDR は、奇妙でも何でもないと考える。なぜなら、SU-30MKK は、データリンクを通じて情報交換し、レーダー情報を共有できる。SU-30MKK は、MIG-31 に似ており、小型の早期警戒機と呼称されるゆえんである。しかも配備、就役、使用経験の期間が J-10 よりも長く、利用価値は高い。

2013 年以降の演習は、2005 年、2006 年前後の演習と比較すると、規模も協同のレベルも確かに向上している。10 年前の空中対抗演習では、第 3 世代機の参加は、通常 3 乃至 4 機程度に過ぎず、或いはそれ以下だった。しかも空中作戦指揮は、地上から行われていた。中国空軍は当時すでに早期警戒機を装備していたが、早期警戒機の任務は航空情報を地上に送るだけで、戦闘機の誘導は地上から行っていた。しかし現在も指揮は主に音声で行っている。

また多少の変化が明確に見てとれる。それは、訓練の基地化である。このため、鼎新飛行場（甘粛省）は改修し拡大されている。滄州の戦術訓練センター（河北省）の燃料タンクは増設中であり、2008 年には 2 基だけだったのが 2012 年以降は 4 基に増えた。燃料タンクの増加に伴って、訓練量が増加している。

以上